

伊東夏子関係田辺家資料(一)

短冊の部 翻刻

栗原	敦・上野英子
赤尾	勝子・菅谷葉子
山本	真由美・越後敬子
土屋	順子・藤井和子

解説

本編は、平成五年に田辺明御夫妻より本学文芸資料研究所に研究委託された「伊東夏子関係田辺家資料」(仮称)のうち、短冊二五六点について翻刻したものである。

当該短冊は、寸法縦四一×横一〇×高さ七・五厘の木管(全面に焦茶色和紙を貼り、蓋の表中央に金泥で桜の紋様を彩色)に収められてある。短冊の寸法はおよそ次の二種。

④縦約三六×横約六厘内外

⑧縦約一九×横約三種内外

いずれも市販・手製とりまぜてある。翻刻では、これら短冊の文様・彩色・紙質その他、形態に関する記述はその大方を省いた。但し寸法に限っていうならば、歌番号1から245までが④、246から256までが⑤の寸法である。また木篋の中にはこれ以外にも、未使用の短冊で④寸法のもの十六枚、③寸法のもの二枚が残っている。

当該短冊の書き方は、上四分の一に歌題（もしくは詞書）、残り四分の三に和歌（稀に俳句）を二行分ち書きにし、文末に詠者名を入れた形が大半であるが、他に、歌題を付けずに天から二行書きに記したもののや、歌題を含め四行書きに記したものの、更には下絵を施したものの等もある。但し翻刻では、これらは全て

①通し番号（歌番号） ②歌題（詞書） ③詠者 ④和歌（または俳句） ⑤裏書  
の順に構成し直してある。

短冊に記された詠者数はおよそ百十一名。他に無記名のもの七首がある。筆跡はさまざまである。但しなかには詠者と筆者が一致しないものもある。詠者に関する参考事項を脚注に記しておいたが、傍証その他向後の調査を要するものが殆どである。御教示を賜われれば幸甚である。

なお伊東夏子関係田辺家資料の中には、今回翻刻紹介する以外に軸装仕立ての短冊が数点ある。

この「伊東夏子関係田辺家資料」の調査については、平成六年より向こう三年間にわたって、文部省科学研究費一般研究(C)の助成を得た。

凡例

翻字に際しては、原態を活すことを旨とし、以下次のように処理した。

(一)宛字・仮名遣・送り仮名・清濁等々、誤字あるいは新旧表記法の混用と思われるものも含めて、全て原本通りとした。

「也」「哉」「覽」「覺」等の付属語についても、平仮名に改めることなく、そのまま翻字した。

(二)漢字は通行のものを用いた。

(三)虫損・摩滅・擦り消しその他で判読不能の箇所には□印を付した。長きにわたるものには「」(十字程度)等と記した。推測した文字も□印で囲むことにした。

(四)訂正箇所のうち、見せ消ちや補入については訂正以後の本文を翻字し、詳細は脚注で説明した。但し一首全体を長い抹消線で消してあるものは、逆に訂正以前の本文を翻字し、脚注でその旨を断わった。

(五)裏書のある場合には、当該歌の後に( )印を付してその本文を翻字した。

(六)通し番号は木宮に収められた現状のまま、上から順に振りあてたものである。

(七)歌題のない作品には、仮に「(無題)」と記したが、詠者名のない作品は、そのまま何も記さなかった。また詞書の改行は任意である。

(八)出詠者に関する考察は、初出の脚注に施し、その文末に参考資料名を次の略号で記した。また『樋口一葉全集』の場合は、参照した巻と頁数を加えておいた。

(近) 講談社『日本近代文学大事典』 (人) 平凡社『日本人名大事典』

(古) 岩波書店『日本古典文学大辞典』 (葉) 筑摩書房『樋口一葉全集』

(九)同一署名の作品は、脚注に――記号を付してその歌番号を記し、検索の便をはかった。なお、夏子・なつ子署名作品の中には、『樋口一葉全集』で樋口一葉(奈津・なつ・夏子)作品とされている四点(うち同一歌一首)を含む。筆跡は他の夏子・なつ子署名のものと異りを見出すことが困難で、同筆かとも思われるが、今後の検討にゆだねたい。田辺

(旧姓伊東) 夏子の作品初出脚注の歌番号では「」を付し、かつそれぞれの作品の脚注に注記した。該当歌を1の裏面とともに図版に掲げておく。

1裏

夕暮  
 かきしんかきさのむくまほの  
 むらりいしんゆかたふらふら  
 る

126

夕暮  
 きのひさきさうんきうつゆさ  
 ゆづのそりおれなきはら  
 る

142表

夕暮  
 ねのしんかきさのむくまほの  
 一のちかきさうんきうつゆさ  
 る

142裏

夕暮  
 あきさうんかきさのむくまほの  
 しんかきさうんきうつゆさ  
 る

157

夕暮  
 こゝろのむくまほのむくまほの  
 る代かきさうんきうつゆさ  
 る

183

夕暮  
 のひさきさうんきうつゆさ  
 夕のちかきさうんきうつゆさ  
 る

行路鶯

なつ子

1 まち侘し鶯の音を玉ほこの道にはからすきゝてけるかな

(裏書 「行路鶯／またれたる鶯のねを玉ほこの道にはからす聞きてけ

るかな／夏子」)

(無題)

夏子

2 朝夕になれておりあるあしたつをまつも千とせの友とみるらむ

(無題)

夏子

3 ものみなのかきり有よとおもひしは君か千とせをしらぬ成けり

冬烟

歌子

4 里人の落葉かきつめたくならしやまのしたみちけふり立みゆ

なみた

春香

5 なくとものかたをいたきてなくさむるをとめの目にもなみたこほるゝ

(裏書 「観□荘作」)

高木ぬしの家の栄えを夏子ぬしにかはりて

みの子

6 ぬけいてし一本竹の葉をしけみ千とせのかけも見ゆる宿哉

1 表の和歌は全て抹消線で消してある。裏に書き直したものが、「なつ子」「夏子」表記法は異なるが、裏表とも同筆である。

田辺(旧姓伊東)夏子。一八七二〜一九四六年。日本橋島屋東屋の娘。明治一五年に中島歌子の萩の舎入門。三宅花圃・樋口一葉と共に萩の舎三才女とうたわれた。

(近)〔葉〕卷三上P.3 ↓ 2 3 27 28  
29 36 37 38 44 45 59 60 63 66 83 85 93  
106 107 111 112 113 114 117 119 121 126  
〔142〕 144 145 149 156 〔157〕 160 167 168 169 173 176 177 179  
180 181 〔183〕 188 189 191 192 198 202 204 208 209 211 212 179

2 「きては」を見せ消ちにし、「なれて」と傍書。同筆。

4 中島歌子。一八四一(或いは一八四四)〜一九〇三年。歌人。小石川水道町に歌塾萩の舎を開く。最盛期には千余名の門下生を擁した。(人)〔近)〔葉〕三上卷P.126 317 ↓ 7 46

5 裏書はペン、青インク使用。 ↓ 16 21

6 田中みの子か。萩の舎では一葉の

雨後萩

7 雨のうちに咲そはりけん萩か花はれていよ／＼色まさりけり

歌子

海上霞

8 見わたせは霞の外の色もなしあをうな原の春の明ほの

のふ子

竹

9 すなほなる姿をめてゝから人も竹の林になをすくしけむ

正巳

(裏書 「楽水 萩原正巳」)

(無題)

10 八十とせのそのことの葉のかす／＼ははまのまさこのつきぬ寿

(裏書 「八十歳老女」)

六十一になり給へるをいはひまゐらせて

のふ子

11 こえそむる六十路を老のはしめにていまもゝとせも君そかそへむ

新竹

重遠

12 生いてしやとのわか竹この君のかけたのむへき夏は来にけり

粒々御辛苦

昔人

先輩弟子にあたる。のち宮大工田中市五郎に嫁す。(葉)卷三上P.27 卷四上P.359 卷四下P.234 ↓ 15 69

8 萩の舎門人小川信子か。(葉)卷四上P.360。或いは伊東夏子の母延子か。 ↓ 11 14 17

10 「この葉」の「の」、「はまの」の「の」、共に傍書。同筆。

13 つとにおき夜半にいねかる秋のをかあせやたのもの露とおくらん

千代子君の古郷へ帰たまふ子ををしみて

のふ子

14 かりのみとおもひけるかな此春は花を見すてゝ君もかへるを

のふ子の君のうへを夏子ぬしよりきゝて

みの子

15 今更にとはて過しを悔るかなわれをまちしときくにつけても

心

春香

16 あめつちのひろくわたりてすむへきをいかてせはむるこゝろなるらむ

池蓮

貞相尼

17 蓮葉のはなより花に風過てかをさへよするいけのさゝ浪

田家郭公

七十七歳 淳翁

18 刈しほの麦のはて結ふ山はたにひとこゑかけてゆくほとゝぎす

(無題)

かね子

19 立かへることしを千代のはしめにてきみかよはひはかきりしられす

雪松樹花

とね

20 萬木に春なればこそしら雪もしとりの花とふりかゝりけん

14 詞書「子を」の「を」、傍書。同筆。

15 詞書にいう「のふ子」は伊東夏子の母延子か。6182参照。

雛祭

21 ひなまつるやとによはれしをとめ子の一群いつる桃さける門

(裏書 「観□莊作」)

(無題)

22 賤かもあるかりほの庵に音たてゝ明ぬくれぬと秋かせのふく

(無題)

23 神無月しくるゝ空を詠めてもおもひそいつる去年のふること

(裏書 「富美子」)

閑居梅

24 うつせみの世のよしあしをよそにして軒はしつかに匂ふうめかえ

(裏書 「從五位河村藤綱」)

増恋

25 物こしに衣のおとなへ聞しよとりかさねても増る恋かな

河上暮秋

26 しつく河ちるやを花の一ふゝきかりの羽かせも秋ふけにけり

春香

多喜の

藤綱

喜雄

幹文

21裏書、ペン。青インク使用。

23秋の舎門人、安藤ふみ子か。(葉)  
卷四下P.614

26久米幹文。一八二八〜一八九四

雪中來客

27 引いるゝくるまのおとのきこゆなりこの大ゆきに誰かきつらむ

月前梅

夏子

28 明るまてのきはのうめの花の上にかゝりてにほへ春のよの月

林紅葉

夏子

29 夕つく日入はてたれともみちせしかた山林くれむともせず

まちてむなしき

胤栄

30 待やおそきおそきや待もあたゝめしひとりふすまの物さむけなる

雪中若菜

展子

31 ふるゆきもいとはてけさは里の子かうちあらそひてつむ若菜哉

門過る人もあらぬをしのすゝきたえすみたれて何まねくらんと

よまれたるかへしによめる

義幸

32 問人もあらぬあら野ゝはなすゝきまねくは秋の風のまに／＼

門過る人もあらぬをしのすゝきたえすみたれて何まねくらんと

あるにかへしてよめる

義幸

年。国学者。本居豊穎を中心に黒川真頼らと大八洲学会を主催した。猶、伊東夏子は彼に国学を学ばんとしたこともあったらしい。(近) (葉) 卷三上 P. 117 卷四上 P. 611

↓ 137 223

30 ↓ 68

32 ↓ 33

33 問人もあらぬ荒野へ篠すゝきまねくは秋の風のまに／＼

暁更鶯

重嶺

34 枝うつるさまも見ましをあかつきのかはたれときにくひすのなく

花のもとにめたてり

葆光

35 木のもとにゑまひかはせるおもかけはさくらにたちもおくれさりける

(無題)

夏子

36 かけてほす軒のひさこのいつまでもくちぬや君のよはひなるらむ

鶯告春

夏子

37 風さむみあけんともせぬまとのとにはるをしらせてうくひすの鳴

首夏月

夏子

38 吹かせはまたまたねとはし居してつきみる夏に成にけるかな

暮山花

忠敏

39 あかすしてかへる夕の山おろしうしろめたくも花にふくかな

折花

大海

40 ひと枝はをらてはえやはかへらましころははころへ花のあるしに

34 鈴木重嶺。一八二四～一八九八年。

幕臣。維新後は浜松県参事等。退官後、歌人として門人二百余人に教授した。萩の舎例会にも点者として出席。號翠園。(近)(人)(業)

卷三上 P. 6 ↓ 65 76 78 90 228 256

35 三田葆光か。一八二四～一九〇七年。黒川真頼に師事し、明治期桂園派歌人として活躍。平井元満編『東京十四家集』(明治16)に鈴木重嶺らと共に入集。(近) ↓ 222

39 松平忠敏か。山田謙益編『明治三十六歌撰』に入集。 ↓ 110 115 123

冬のなかはころ仰ことにて浜の離宮に遊びけるとき

道子

41 君かためたつねてみれば冬かれの野にもわかかなの有世也けり

栄内両翁三年の忌にあたらせ給ふに

□雲

42 是柴におくしら露をなき人のたまかとみればすゝしかりけり

(無題)

□□真

43 日の御かといまかあくらし玉敷のみやこはなへて霞たな引

春閑居

夏子

44 あし引の山辺の庵にすみぬれとはるはさすかに人そとひける

(無題)

なつ子

45 末遠きよはひくらへてわか浦にあそへるたつそ君か友なる

猿

歌子

46 ならえたる事はなしとも山さるの人まねならぬよをへてしかな

明治天皇御製

之謹謹書

47 さしのほるあさひのことくさはやかにもたまほしきはこゝろなりけり

(無題)

禮子

41 小池道子か。明治二九年、『やなぎのつゆ』に出詠。跋を記す。序は高崎正風。伊東夏子蔵書中にあり。

48 山にのほり磯にあそひし鎌倉のむかし恋しききのふ今日かな

恋祝言

前知

49 よひくの我かよひ路の関もりよ戸さぬ御代にならひこそすれ

紅葉色々

直恒

50 紅るに朽葉ましりに染はてゝ春の花より中／＼にこそ

首夏藤

51 春なつとあらそふ花の藤かつらいつれを時となひく成らむ

(無題)

波多野洋子

52 山々は向うかすみて雨あしははやま近なる水田(ママ)までもきぬ

(無題)

祭

53 あたらしくつくりかへたる礎のものこのころをわするなよきみ

岳飛張巡 優劣如何

祭

54 ひをへつゝまもるあしへは水鳥のうきせのあとにおとらざりけり

澤月

55 しきのたつまこもかくれの澤水にあさましきまですめる月かな

48 中村礼子か。萩の舎門人。(葉)巻  
四上 P. 378 ↓ 153 241

50 ↓ 163

53 小出祭。一八三三〜一九〇八年。  
歌人。御歌所寄人。号樞園。赤松  
庵とも。伊東祐命・高崎正風らと  
共に萩の舎を援助した。(近)(人)  
↓ 54 86 118 138 157

55 裏書「重女」↓ 102

(裏書 「重女」)

間庭霰

莞爾

56 人とはて苔のみむせる庭のおもはは<sup>(マ)</sup>はしるあられも音せさりけり

葉月の五日梅の屋にて涙のみ物語しけるをり夕さりつ方の月

おもしろく出たり軒のもとに葦あり

今世

57 ゆふまくれ難はの秋の心地して軒端の葦のさはる月影

(無題)

長嶺

58 神無月春かと斗吹かせに庭の桜木散そめにけり

愛萩

夏子

59 わか宿に咲たる萩ものへなるもめつるこゝろはかはらさりけり

(無題)

夏子

60 村しくれふるおときよてみいたせはにはの浅ちふくれはてにけり

のふ子君のみまかり給ふと聞て夏子君のもとへ

龍子

61 残れるもすきしもいとゝおもふ哉おひたる親を同じもつみは

(無題)

□類

56 丸山莞爾か。一八三六〜一八九八年。維新志士として坂本龍馬らと交わる。明治期、内務大臣書記官、高知県知事を経て退官。明治三十六歌撰』に入集。(人)

57 詞書「葉月」の「月」、傍書。同筆。「月おもしろく…」以下二行書きにした歌の行間に書く。太陽と穂穂の下絵あり。短冊の地辺部、鷹滅が激しい。↓150

59 短冊は金砂子散らしの白帛を台紙に貼付したもの。32の短冊と同一。

61 田辺龍子(三宅花園)か。萩の舎人。小説家・随筆家として活躍。(近) 152参照。

62 ことたらぬこゝちしてけり鶯のこゑは待えぬ梅の下陰

暁春月

夏子

63 咲花のこのまに落し月みればよはあけかたに成やしぬらん

駿河にて我入道よめる

操山

64 大空もこゝろも共にはれにけりふしの高根に雲もかゝらす

すてかたきもの

重嶺

65 もろこしの鳥のあとこそ捨られねわか秋題すのものならねとも

林中花

夏子

66 よふこ鳥こゑにひかれておもはずもふかき林の花をみしかな

閑庭梅

真頼

67 夏すきてさしたるまゝの窓の戸をあけよと梅の花はさくらむ

夏雲

胤栄

68 ひむろ山やまに山なすしら雲の空のはたてはすゝしけもなし

此たひおのれの還曆のいはひを人々のよりてせさせ給へるかしこまりを

節露梅祝といふことを

みの子

64 大西祝。元治元年生。同志社神学科・東京帝国大学哲学科卒。西洋詩学や哲学倫理学に基づいた啓蒙的な批評を行なう。伊東夏子とはキリスト教を通じて親交があった。号操山。(葉)卷三上P.451

67 黒川真頼。一八二九〜一九〇六年。国文学者。歌人。歌は大八洲学会に参加。『明治三十六歌撰』に入集。(人)(近)(古)。夏子の蔵書に真頼著『玉の緒交格弁』あり。

69 身にあまるめくみの露にかすならぬおい木のうめも春に逢にけり(ママ)

四十路にいる日感ありて

四明

70 大唐のおほき聖の言は遠しわれは四十路にいよまとはむ

待鷺

魚貫

71 うくひすをまたぬ日も無待ときは山にこゝろそ絶すやらるゝ

青

72 河竹の葉こしの色にまかふかなたまのすたれにかくるあけひは

(無題)

縁明

73 冬されとのこると見てもみちはのもろくもちるか夜半の嵐に

夏花

祐命

74 こまとめて水かふ岸をはなれけりむちにやかけんうき草の花

禁中

祐命

75 こゝへのうちはしらねと大君の大宮所みれば尊とし

名所鶴

重嶺

76 朝ほらけふしをみるたにゆたけきをたつこそあそへ浮島かはら

73 ↓ 81 97 100 124 185

74 伊東祐命。一八三四〜一八八九年。歌人。中島歌子と共に加藤千浪に学ぶ。萩の舎例会に点者として出席。伊東夏子蔵書にその遺稿集『柳の一葉』あり。(近)(人)(葉) 卷三下 P. 635 ↓ 75 96 98

閑庭霏

忠保

77 ふゆかれて花も紅葉もなき庭の小さゝかうれにふるあられかな

朝花

重嶺

78 朝日かけほのめくまゝにしらけたるはなもふたゝひいろそひにけり

恋

ひとみ

79 書送る筆の匂ひとつり香の薫り合たる妹か玉章

夏草露

貞相尼

80 花のゝを思はむものか朝夕に露もさかりの庭の夏草

(無題)

縁明

81 十とせ餘りみし世をなれものひねになくや卯月のやまほとゝきす

のふ子ぬしをいたみて

つや子

82 打ゑみてをさな遊ひを見し君のおもかけいまものはるゝかな

(無題)

夏子

83 降やかて消るかつねのあわ雪もをりからみればものそかなしき

夕暮

79 「うつり香」の「り」、傍書。同筆。

82 小笠原艶子か。萩の舍同人。(葉卷四上P.384。猶1561参照。↓236)

83 「つねの」「の」は、「の」「の」上に「能」と重ね書き。

84 軒近き花にきなれて鶯のあかすかたらふはるの夕暮

(裏書 「ゆき子」)

岡寒松

夏子

85 冬くれと落葉こほれし跡もなしまつのみたてる岡こえの道

閑庭花

祭

86 萩の葉もしつまる庭に鳴池のこゑはのこりてさよふけにけり

薄暮雁

公純

87 夕日影なこりみゆなる波のとをくれはてぬまと雁わたるらん

琉球紫おもとゝいへるを人の御もとへ送り侍るとて

政蔭

88 遠つ国うるまの島に生といふくさのゆかりはより処なし

露時雨懐旧

89 別れしもけふひとゝせの神無月しくれひまなくぬるゝ袖哉

(裏書 「誉子」)

月前郭公

重嶺

90 ほとゝきす□□□なるてる月のかつらのかけにますかけはあらし

(無題)

91 秋かせもこゝろしてふけきのふ今日かと田にみゆるわせのはしり穂

幄

□郎

92 より直はことそいと厚し秋の暮

郭公近

夏子

93 耳うとき人はしらても過すらむこゑほのかなるはつほとゝきす

借楽園にて人々としことにそのゝ梅を

某恵

94 御その生の名におふ春のけふとてやふみこのむ花のゑまひかほれる

寄民祝

嘉吉

95 君か世のめくみの露は民草のさかゆるうへにみえ渡る哉

皇后宮の御花見にめされし時禁庭花といふ御題を賜はりて

祐命

96 とふ蝶のかるき身なからこゝのへの御園のはなになるゝ今日かな

(無題)

縁明

97 三年経し其侘も神無つきはつかにのこる庭のもみちは

新秋風

季知

91 ↓ 108

95 ↓ 123。また 133 (署名「嘉」) も筆跡似る。

98 あき風は桐の一葉と思ひしを先あはれとそさそひ初けれ

春橋

祐命

99 桜さく春の野川の丸来橋たかあさけよりかけわたしけん

御をくり名の六文字を句のうちにいれて見宝塔品の心をよめる

縁明

100 松かせの音も妙なり月と日のひかりならふるわしの高ねは

(無題)

忠秋

101 いつしかもまいりはすらむ山科の栗栖のゝへのおくつきとこ

夜蛙

102 さよふかくかとかたのかはつこゑすなりおほろ月よや雨になるらむ

(裏書 「重女」)

(無題)

夏子

103 花の色のくれはてしより虫の音のさやかに成ぬ野へのはき原

霞間柳

夏子

104 春風の吹ほとみえて立おほふかすみをもるゝ青柳のいと

赤

98 三条西季知か。一八一〇〜一八九〇年。討幕計画に破れた七卿落ちの一人。維新後は明治天皇の和歌指導等を担当。香川景樹・高松公祐門人。(近)(人)

101 渡忠秋か。一八一〇〜一八八一年。桂園派歌人。宮内省歌道御用掛担当。(近)

105 しくれする雲も日影にそめられて紅葉をおろす峯のこからし

竹間鶯

夏子

106 うくひすの声長閑なる山さとの竹のした道春風そふく

冬松

夏子

107 おく霜のけふる朝に見出せはさらに色こき庭の松かえ

(無題)

芳枝

108 したより外に霜ふむ鳥もなし浅芽のかれ葉庭に飛きて

(無題)

□根

109 もり捨し山田のひたの掛繩にふきのこりける秋の風かな

暁更鶯

忠敏

110 呉竹のはやまの陰はくらけれとよはあけたれや鶯のなく

月前萩

夏子

111 こと更にこはきか上のした露をてらすとみゆる秋のよの月

冬鶴

夏子

112 吹しをる木からしあらし山かつのこすゑにねふるたつも有けり

106 「山さとの」「さと」、「はじめ」か  
け」とし、見せ消ちを打って「さ  
と」と傍書。同筆。

雨中春草

113 ぶりつゝく春のなかもわか草のもえ出るころはのとけかりけり

夏子

(無題)

夏子

114 常磐なるまつのみとりの久しきをきみかよはひの友とこそみめ

梅花誰家

忠敏

115 おほつかなたかやとよりそ梅かゝのこてふにゝたる春風のふく

(無題)

八十八翁  
春用

116 解ぬるか岩まのこほりおとすなりけさ谷陰もはるにしられて

(裏書 「咲き揃ふ雪とも見へし梅はやし」)

林中花

夏子

117 をはやしの松の梢もみえぬまでさきをゝりたる山桜かな

(無題)

榮

118 東の家のさかえをみながらもにしへのみは何いそぎけん

雨後萩

夏子

119 今過し一村さめにはきか花にはもせきまてみたれ合(ママ)にけり

116 裏書は表とは別筆。

(無題)

120 わか魂を容はやと□の挾るれはよしやふれなとおもふ頃哉

時懋

(無題)

121 まてと／＼わか山さくらさかぬかなたゝしら雲の峯にみえつゝ

夏子

時々逢恋

□□

122 秋田かるかり田にましろしひなせのしひてまてはや時々はくる

都朝霞

忠敏

123 うち日さす都大路のたてぬきにたなひきわたるあさ霞かな

伊東君の父君の二十三回忌に

縁明

124 しのはるゝさ月の雨のふることをなれもかたらへやまほとゝきす

(無題)

久

125 神無月はつかのかしの影消えてしくれとふるはなみた成けり

夕郭公

夏子

126 しのひ音もさたかにきゝつ静かなるゆふへの空になくほとゝきす

旅行初雪

文興

122 稲穂に案山子の着色下絵あり。

125 ↓ 166

126 樋口一葉歌。(葉)卷四下P. 592。他の夏子署名作品と同筆か。樋口一葉。一八七二〜一八九六年。↓ 142 157 183

127 朝山をくなくかしこゆる旅ひとのかこと斗のけさのはつ雪

鷺出谷

嘉吉

128 なかれゆく雪けの水に鷺もさらはと谷を思ひいつらむ

野春風

夏子

129 飛てふのそてかるけ也春のはふくとしもなき風や吹らむ

夏草露

夏子

130 咲出む花のあらましみゆるかなあさ露おける野への夏くさ

海上霞

なつ子

131 もしほ焼けふりもこめて春霞なみちはるかにたな引にけり

田家秋風

さたむる子

132 ほろ／＼とぬかこゝほるゝ小山田の夕へのかせは秋めきにけり

(無題)

嘉

133 もれ出る雲まの月に影みえていやめつらしき山ほとゝきす

さなきたに淋しき秋も菊月のはしめの六日に妻をうしなひ

同し月十三夜も殊に晴ぬれは

重雅

127 「文典」或いは「文雄」(井上文雄)か。井上文雄219参照。

132 「さたむる子」は「定子」か。  
『明治三十六歌撰』入集者に大野  
定子がいる。

134 思ひきや妻は浄土て後の月

(無題)

貞信女

135 蜀<sup>135</sup>□かの□<sup>135</sup> (十字程度) よりいをやすからぬ世にかゝりけり

水鳥

清美

136 さえかへり霜おく夜半も波まくら身はならはしの冬の水とり

霧中川

幹文

137 わたり来し須芳の氷は夢なれや雪とけはふる<sup>(マ)</sup>天の中川

窓新竹

粲

138 かたつふり葉末をつたふ若竹の窓<sup>138</sup>につく迄なひきける哉

首夏鶯

夏子

139 みつえさす山のした道鶯のこゑをのこして春は暮にき

香煙

温知

140 薫れともはかなきものは煙かなきゆるを人の身の上にして

旅郭公

由清

141 ふるす出てなれも旅なるほととぎす草のまくらに声かれすなけ

135 損傷激しい。「貞信」は三輪貞信尼か。一九〇二年没。京都祇園歌妓。香川景樹門下で蓮月に学んだ。(人)

136 ↓ 138

141 田横山由清。一八二六〜一八七九年。

(無題)

夏子

142 秋またて咲しききねのきくの花けふの手向とみるそかなしき

(裏書 「(無題) / あきまたて咲しききねのきくの花今日のたむけとみ

るそかなしき / 夏子」

田家秋風

□□

143 涼しさもたりほの稲か都辺のねきしの田居も秋の朝風

(無題)

夏子

144 三千とせの君かかさしに咲ぬらんにはわか木のもゝの初花

行路時雨

なつ子

145 山風の時雨のあめをさそひきて谷のした道ゆきそわつらふ

元日子日

幸枝

146 立春の今朝のはつねは鶯もよし野の國栖も及はさるらむ

寄虫雑

永好

147 世の人にいとむはかりのちからなきわれやかへるのたくひ成らむ

落葉

清美

146 ↓ 199

国学者。法制史家。黒川真頼らと共に「舊典類纂」等の編集に従事。「明治」現存「三十六歌撰」に入集。(近)

147表は、「手向」その上に「と」と重ね書き。「かなしき」の「し」、上字「な」の終筆が横に流れたため、途中で書きさしたか。その後、一首全体に抹消線をひいている。裏に清書したものか。樋口一葉歌。(葉)卷四下P.592 ↓ 126

148 よひのまの時雨はけさの木の葉にてこゝろのうらのたかふころかな

首夏風

夏子

149 山はたのむきはなひかし吹風になつをみせたる朝ほらけかな

夕雪

今世

150 ふりそむるゆふへよりこそおもほゆれつもらむ松の雪のあけほの

(無題)

上千代

151 陸英もあらしして行ぬ梅貫ひ

月前時雨

榮

152 月かけは色□の葉にさしなからもりの夜嵐しくれ来にけり

(無題)

湖平

153 十余りみとせのむかしおもふにもろきは老のなみたなりけり

(無題)

行年八十七

月玄庵

154 なる子にておとす小鳥の又来るをいねと追やる秋のわ田守

(無頭)

雅文

155 かきねらは濁りもやせむ初もみちにはふ木かけの山川の水

154 「小鳥の」の「の」傍書。「月」の第一筆目は二度書きか。墨色同じ。

月前花

156 月かけのかすむ岡へに遠しろくみゆるや花のさかり成らむ

(無題)

夏子

157 君か家の庭の松かえふく風は千代をならせるこゝちこそすれ

(無題)

禮子

158 こむとしはあはむといひし十日餘りきみうせんとは思ひかけきや

新樹

道文

159 風にちるゆふへの露の玉かしはみとりすゝしき夏の色哉

(無題)

夏子

160 啼せみのこゑにも夏はなかりけりしみすなかるゝ松のした陰

顕恋

光之

161 君かのを駒の小鈴の音たるみきませし道を人しりにけり

春風

高駒

162 ふくとなきはるの風にもしほかまの煙はにしに猶なひきつゝ

(無題)

直恒

157 樋口一葉歌。(葉)四下P.588 ↓ 126

161 「きませし」の「し」、「る」に見せ  
消ちをし「し」と傍書する。同筆。

162 第一字目「ふ」は「お」とも。

163 いかにせむ別れかたさは剣太刀ぬけ出てこそわひしかりけれ

霧間暁月

重遠

164 むしの音はなほよをこめてきこゆれと霧にけたるゝあけかたの月

(無題)

弘子

165 堪えゆかん心きまりぬ力ある君かゝいなに抱かれいれは

思恋

久

166 おもふともいはて心に思ふこそ人のおもはぬおもひ也けれ

月出山

夏子

167 山まつのこすゑはなれて秋の月いまかふもとの野辺にいつらむ

(無題)

夏子

168 ふく風のさそひ残しし花みても散にし君をおもふころかな

行路霞

夏子

169 見かへれば霞に遠く成にけりいま過てこし野へのほそ道

月前虫

堅□

170 草ふかき秋の野原にすみなれて月をそこゝにまつむしの声

(無題)

「翁」墨」 和染

171 あらたまる今朝の機嫌を幾千代も

春風入簾

安彦

172 吹かせはまた寒けれどをすたれてあらぬ春に成にけるかな

(裏書 「春風入簾／ふくかせののとかになりて野に山にこゝろもうこく

をすのうちかな／安彦」

行路花

夏子

173 さきつゝく花の木かけを行みちはおそきくるまもうれしかりけり

白

174 白雲のやへたつ嶺の山さくらそらにもつゝく瀧つ河なみ

暁更鷺

重遠

175 春はいまこゝろうきたつ空ならしあくるもまたすうくひすのなく

夏朝

夏子

176 あさはらけ池のはちすの露みれはうつる日かけもすゝしかりけり

人伝郭公

のふ子

171墨下絵入り。「翁」墨」は絵師の署名か。

172加藤安彦か。一八二〇〜一八九八年。尾張犬山藩士。維新後は品川駅取締隊長等。傍ら歌道を教え松園と号した。萩の舎の歌会にも出席。家集「松廻したたり」(人)(葉)卷三上P. 3 ↓ 184 194 235

177 耳うとくなりやしぬらんほとゝきすひとつてにのみきゝわたる哉

葉

千之

178 竹と木の根のみと何に思ひけむ花もみるめのくすり也けり

(無題)

夏子

179 千とせへん君かそのふの老松はさらに色こきこゝちこそすれ

春鶴

夏子

180 霞たつ小松か原におりたちてあそへるたつそ君か友なる

(無題)

夏子

181 谷のとをけさ立出てうくひすもまつ君か家をおとつれにけり

正田ぬしか東京へかへるをり

□□

182 むさし鐘かけるなるも玉ほこのまことのみちをふみなたかひそ

夕子規

夏子

183 しのひ音もさたかにきゝつ静かなる夕へのそらになくほとゝきす

夏居所

安彦

184 ひろからぬわかやとなれとこゝかしこところかへてもすゝむころかな

(無題)

185 もみち葉のしはしなちりそ惜まれし去年の名残のおもかけにせむ

縁明

秋夕

三郎

186 やなぎちるかたとたをはなれおほそらをひとりなかむるゆふまくれかな

黄

187 枝かはすきしの山ふき花ちりてこかねの露になみそこへける

窓早梅

夏子

188 うめの花さけるをみればさしこめしまこのうちまで春めきにたり

折菊

夏子

189 すゝき原分行のへにはからすも一もと得たりしらきくの花

花感

以中

190 さくら花浅くこそ見れ深くしも思ひ入なは如何に哀れか

松間鶯

夏子

191 うくひすの初声すなり朝日かけかすむ岡へのまつの梢に

雪中待春

夏子

186 「かたとたを」の「を」傍書。

192 うれしくもわか待雪は降にけりなとくる春のおそきなるらむ

草津にて

曲齋

193 別れ路やちかくに掴む竹の餅

橋遠花

安彦

194 さきつゝくつゝみのさくら此はしのうへよりみればひとめなりけり

田家秋風

花朝

195 秋風にまかせてをらん小山田のかりほの庵のひたのかけなは

寄亀祝

196 をしこめていわふいはるの水ふかく亀住淵のそこひなきまで

山路時雨

周魚

197 しくれゆく雲のひまよりみゆるかなゆふ日さしわたるみねのかけはし

行路月

夏子

198 まつの火をけしてやゆかんさしのほるつきおもしろき山の下みち

霰

幸枝

199 雪やとす小笹と心しられけりおとのみにして止めあられに



元祖百回追福

東伊

207 もくとせを周る月日そ翁草

(無題)

夏子

208 氷たにまた結はぬをわか山のたかねはいつか雪降にけり

(無題)

夏子

209 玉たれのをすの外山の月みれはしのふむかしもおほる成けり

顕恋

廣子

210 あしの根のあらはれにけり難波かた身をつくしてもしのひしものを

夕春月

夏子

211 夕ひはり鳴こゑ絶てうち霞むむすふは月に成にける哉

(無題)

夏子

212 谷のとをけさ立出てうくひすもまつ君か家をおとつれにけり

(裏書) 「庭早梅 / 風さむき窓を明てもみつるかなこれやことしのうめのはつ花

/ 夏子)

黒

歌人。また今様を好み、今様翁とも号した。(人)

210 鳥居廣子か。陸軍中将鳥居小弥太の長女。(華巻三上P.8 巻四上P.360)

212 薄様の私製短冊。いま四周をふちどった方を表とした。

- 213 鳥羽玉のやみのうつゝにかきやれとなれてかひなきとこのくろかみ  
野時鳥 美蔭
- 214 夏狩の矢た野にえてしゆみはりのつきに一声啼しほとゝきす  
海辺松 宣雄
- 215 田とひらけはたとかはりてすみのえのなきさにとほきあらゝまつ原  
冬竹 夏子
- 216 木からしのふく音高き窓のとのたけにそ冬の色なかりけり  
古寺夕 美蔭
- 217 物たへてきくにさひしきふる寺のあめさ□しふくゆふあらしかな  
人伝子規 なつ子
- 218 人すてにきゝてける哉ほとゝきすいまた夢にもおもひ遂ぬを  
雪中鳥 文雄
- 219 さよふかくねくらの雪や染る覧いねさわかしくからず啼なり  
岡新樹 夏子
- 220 かた岡のわか葉のかけにきてみれば花にあそひし跡なりけり  
(マテ)

214 薄様の私製短冊。 ↓ 217

215 梅村宣雄か。秋の舎例会に点者として出席。当該資料に於ける短冊の出詠数は、夏子について多い。  
(巻) 卷四上 P. 37 ↓ 224 230 231 233 248 249  
250 252 253 254

219 井上文雄。一八〇〇〜一八七二年。歌人。国学者。岸本由豆流・一柳千古に国学を学び、江戸派の最後を飾った。(人)(近)

(無題)

221 忍ふかな過るもはやくかそふれは三とせのけふも夢のまにして

(裏書 「真子」)

深更郭公

葆光

222 あふ坂の山ほととぎすそらねにはあらしかとおもふ夜半の一声

古戦場

幹文

223 ますらをの草むすかはねくちし野のあととふ物はあらしなりけり

海辺霞

宣雄

224 打わたすえそか千しまの春霞いつこか國のさかひなるらん

野蝶

朗子

225 口なしにすゝな花咲のへみれはつはさもかろくまふこてふ哉

新竹

まつ子

226 ぬけ出てゝ一ふし高き若竹を文よむ窓のしをりにやせむ

(裏書 「青山南町六丁目百四十一番地松木方奥野まつ子」)

新竹

治子

225 前田朗子か。前田利嗣夫人。(葉)  
卷四上 P. 523 ↓ 229

227 露結ふまとの若竹いつしかとまき葉ひらけて色そひにけり

(裏書 「麴町一番町四番地 徳大寺治子」)

夢後想

重嶺

228 まのあたり別れしよりもはかなきは逢見しゆめのさむるなりけり

月前梅

朗子

229 まとあけてみればかきねの梅かえにいつかかゝりぬ夕月のかけ

残紅葉

宣雄

230 嬉しくも小春の空に逢にけりちりおかれたる庭の紅葉

野残雪

宣雄

231 ふきすさふ野風を寒みしもと原氷れるまゝに残る雪かな

初雁

酉子

232 めつらしく聞てけるかな秋風のみにしむゆふへわたる雁かね

夢後想

宣雄

233 あふとみし夢のうき橋なか絶てねさめわひしくぬらす袖かな

山家水

貞子

232  
↓  
242  
247

234 我ために淋さそふる友ならむほそける河の水のひよきは

年々待郭公

安彦

235 ほとよきすことしもいたくまたするは出くる山やとほくなりけん

時雨

つや子

236 いねかたき里のつまとに音たてよいくたひよよのしくれなるらん

野残雪

貞子

237 かれ草の青みわたりし山陰の野へに残れる雪も有けり

月前梅

利嗣

238 春をあさみほころひ初し梅かえにさえてもやとる月のかけかな

杖

いつ子

239 ひらけ行み代にしあるをみな人の杖をもつこそあやしかりけれ

新竹

磯子

240 賤の男のぬきもらしたる竹の子のいつか千尋の陰と成ぬる

残紅葉

禮子

241 草も木も霜かれはてし野原にのこるや何の紅葉なるらん

234  
↓  
237  
243  
255

夜時雨

242 宵のまのさやけき月にひきかへてまとのとたくさよ時雨かな

通出恋

貞子

243 あふ事のかなはぬ中は玉つさのかよふ斗そいのち成ける

雨後花

もと子

244 雨晴てまた大そらのくもる日そさくらの花は見るへかりける

山路花

鶴子

245 咲つゝく花より花にたひいしてしらぬ山ちにけふも暮しつ

初雁

栄子

246 夕月のかけもさやかに花すゝきまねく方にとわたる初雁

年々待郭公

酉子

247 こそもなほまたれし比そ夕月に一こゑなれ山ほとゝきす

田蛭

宣雄

248 かりにとてくる人もなき垣つたの蛭は数の増りけるかな

夏燈

宣雄

246  
↓  
251

248 歌題の右傍に薄墨にて「十三」の書入れ。

249 夏のよのみしかきほともしられけりよひのまゝなる里のともしひ

初雁

宣雄

250 雨になる空と思ひてねし夜半のまくらにちかき初雁の声

杖

栄子

251 千よろつをさこそへぬらめいつもくつゑをそへたる園の白菊

月前梅

宣雄

252 のとかなる朧月夜となりしより梅も雪にはまかはさり覺

雨中待友

宣雄

253 を車に雨おほひして問こよと契りし友にいひややらまし

夏庭

宣雄

254 草に木に水をそゝきてしはらくはなつなき庭になしてけるかな

折花

貞子

255 うるはしき桜の花を折かさし山路をかへる人も有けり

夏燈

重嶺

256 道のへに見てたにすゝしけつりひをひさけるやとのともし火の影

249 歌題の右肩に朱筆にて「五二」の書入れ。

254 歌題右肩に朱筆にて「十三」の書入れ。

256 歌題右傍に朱筆にて「六五」の書入れ。